

「読み取る」こと、そして伝えること

黒澤 弘光

一 より良い古典の授業を目指すために

○重要語句の意味と文法関係（漢文では句法）の説明をした後、現代語訳をしておしまいという授業は、生徒の古典離れを招いてしまう。

○教師が、自分の目で読み、自分の頭で考え、自分自身で納得のいく読み取りをしたうえで授業に臨むことが大切である。

← 教師自身が、自分の教える文章・作品（＝教材）に知的興味を持ち、共感や感銘を覚えているかどうか、生徒を魅きつける授業にできるかどうかに直結する。

○具体的な読み取り、授業準備としては、

(1) 辞書、文法書を使い、さらには注釈書、教授用資

料等を活用して、基本的な読み取り、解釈を確認する。

(2) 標準的な解釈や「定説」となっている理解・読み取りの中に、自分の納得できないものや、掘り下げが不十分、または不適切と思われるものはないかと確認する↓自分自身で納得のいく読み取り・解釈が得られたか。

○適切で、見落としのない読み取りを目指すうえでの着眼点

(1) 語句の意味やニュアンスを、確実、かつ自覚的にとらえる。

(例)・「あはれなり」と「をかし」の差違をどう感じ取り、どう教えるか。

・「推量」の助動詞がいくつもある理由をどう考え、どう教えるか。

(2) 表現のしかたとそこに用いられている技巧、それによる表現効果を把握する。

(例)・『源氏物語』桐壺巻のはじめの部分にある「まづはさせ給ふ」・「なぜ」まづはす」という、めったに使われない語を使ったのか。すぐ後の部分では「さぶらはせ給ひ」という、ごく普通の表現が使われている。

・『平家物語』忠度都落のはじめの部分にある、
さして意味のないように見える表現の意図
は？（「侍五騎、童一人、わが身ともに七騎」
「薩摩守馬より下り」）

(3) その文章・作品の背景にある状況との関わりを踏
まえた読み取りをする。

(例) 『伊勢物語』梓弓のはじめに「官仕へしにと
て行きけるままだに、三年来ざりければ」・・・
「三年」という時間の経過が、当時（ことに
若い女性にとって）どんな重みを持っていた
か。

・『平家物語』忠度都落で、俊成に対して述べた
忠度の言葉に、「一首なりとも御恩をかうぶら
う（かうぶりて）」と二度も繰り返されている
懇願の真意（死後であっても自分の歌はきつ
と撰ばれて入集するだろうという自信はない
のか。）。

(4) その文章・作品の構成にも目を配る。

(例) 『源氏物語』桐壺巻

・冒頭の「いとやんごとなき際にはあらぬ」で、
すでに更衣とわかる。直後の「同じほど、そ
れより下蔭の更衣」で、大納言家からの入内

二 具体的な作品の読み取り・掘り下げ

とわかる。現在の読者の理解より少しずつ早
い段階での認識が可能な表現がされている。
◎「現代語訳ができた」という段階は、読み取りの
入り口に立ったということである（現代文の授業
なら、それはほぼスタート・ラインのはず。それ
が古典のゴールであってはならない。）。

(1) 「信濃路は今の壘道刈株に足踏ましなむくつはけ
わが背」（『万葉集』東歌）

・妻が恐れている事態・・・夫が、篠竹や細い木
などの、先の尖った切り株で足裏に傷を負うこ
と（破傷風菌やブドウ球菌の感染により、死
に至ることも珍しくない。）。

・「くつはけ」と懇願された夫は、どのようにして
「くつ」を手に入れるのか・・・旅の途中で買
ったり、自分で作ったりするのは不可能↓こう
歌ったときに、妻が自分で作ったくつを渡して
いるはず。

(2) 「韓衣裾に取りつき泣く子らを置きてそ来ぬや母
なしにして」（『万葉集』防人歌）

・なぜ「裾に取^りつき」なのか・・・初めから裾にはすがりつかないはず。↓何度か腰や足、手などにすがりついては引き離された後、もう地面を這って父を追っているという状況であることが推察できる。

・「韓衣」は枕詞なのか・・・当時の庶民は貫頭衣を着ていたはず（「裾」は無い）。やはり、旧来の説のように、防人の制服と考えた方が妥当ではないか。

・「置きてそ来ぬや」を「置いて来てしまったよ」と現代語に置き換えても、「そ」で強め、「や」で詠嘆しているトーンの悲痛さは表現できない。「授業」の利点を生かし、教師の声（語り）で、できる限りそのトーンを再現して伝えることが大切だ。

(3) 『伊勢物語』東下より

・「かかる道はいかにかいまする」・・・普通の疑問文のような現代語訳になっている。「いかでか」は、反語表現となることが普通で、時として、「信じられない」というようなニュアンスを持った強い疑問となる（『大鏡』太政大臣道長伝に、兼家の言葉として「いかでかかからむ」

とあるのもその一例。」「修行者」の驚愕ぶりを反映させた訳を工夫することが必要。

・「駿河なる宇津の山辺のうつつにも夢にも人逢はぬなりけり」・・・四・五句が「その人」（京にいる女性）を薄情と恨む歌意となっていることに着目し、「恋のテクニク」を駆使した歌としてとらえる。

・「渡し守」の「はや舟に乘れ。日も暮れぬ」という言葉に敬語表現が用いられていないことに着目することが必要（「修行者」は尊敬動詞「います」を使っている。・・・当然の礼儀も弁えない「東人」を描写し、避遠の地に来てしまったという思いを強調している。

(4) 『大和物語』姨捨より

・「をば」を「伯母」「叔母」と表記することには慎重を要する・・・可能性としては両方あり得るが、「叔母」である蓋然性の方が高い（「伯母」であれば、当時の結婚適齢期を過ぎている公算が高い。この時代、更級の「高き山のふもと」の農村では、女手ひとつで農作業をして生きていくのは難しく、独身のままでいる女性はかな

り少なかつたはず。」「叔母」であれば、まだ結婚適齢期にあると思われるが、幼い甥を引き取ったことで、自分の結婚は諦めざるをえない境遇になつたことが推察される（後のストーリー展開と考え合わせると、「叔母」の憐れさが際立つてくる。）。いずれにせよ、軽々に漢字表記をするのは避けるべきである。また、「伯母」「叔母」のどちらであつても、幼い甥をかかえての生活がきわめて貧しく、苦しいものであつたことは明らかであり、その結果が「老いかがまりて」「いといたう老いて、二重にてゐたり」という状態である（この頃の「をば」の年齢が三十歳そこそこであると推定されることも、生徒にとつては驚きである。）。ちなみに、「わかき」「わかく」の表記に「若」を用いるのも、生徒をミス・リードする恐れがある。

この文章には、「をば」の心情についての表現が「限りなく喜びて」しかないことに留意する必要がある。・ストーリーの展開に沿って、「をば」の心情を推察させる授業が望ましい。ことに、甥の誘いに「限りなく」喜んだ「をば」の心情について考えさせることは、この後に起こることとの対比の上からも、重要である。

・強調表現が、「いといたう」「限りなく」「いと限りなく」というバラエティーを持つていることにも着目したい。山上に輝く月が、この男の心を射抜くような効果を持っていたことが読み取れる。

・「高き山の峰の、下り来べくもあらぬ」という所まで「をば」を背負つて行くのに要する時間に着目する。・「をば」は、相当早い段階で、寺への道ではないことに気づくはず。なぜそれをとがめたり、不審に思つたりする表現がないのか。↓夜の山へ入つて行く甥の意図を、「をば」は察知し、あえて無言でそれを受け容れたことを示唆しているのではないか。

(5) 裁断挿擬宝珠の銘文

・死後三十二年もの歳月が経つても、息子への愛情を保ち続けている母の想いを汲み取る。・それが眼目であることは言うまでもないが、この母の心情を、さらに掘り下げて考えることも必要である。

・この文章は、老いた母(若くても六十歳代半ば)。

おそらくは七十歳前後か)自身が筆を執つて書いたものである(表記、及び、「十八になりたる子」「念仏申給へや」という表現から)……僧侶や漢学者などに依頼したのでは、漢字を多用した文になってしまい、多くの庶民には読めないことになる。もちろん、母の想いも十分に反映されないものになるだろう。口述して側近の、文を書き慣れた者に書かせることもしていないのは、本当なら母が自身で人々に、息子「ほりをきん助」のために「念仏申給へや」と呼びかけたい想いが強かつたためであろう(この母は橋の完成前に亡くなっており、この文章を作ったころには、病の床にいたと思われ。)

・母の願いは、自分の死後、誰も「きん助」のことを思い出して念仏を唱えてくれなくなってしまうという事態を防ぐことである。この母は、目前に迫っている自分の死よりも、その事態の方が恐ろしかったのである。その願い一筋にこの文章を綴つた母が、自分の名を記すこともい

ていないことを見落としてはならない。

◎このように掘り下げて読み取ること、約四百年前に亡くなった一人の母親の想いを確かに受け止めること(そして、それをさらに後世に伝えること)ができるのである。

「精進川裁断橋銘文」

てんしやう十八ねん二月十八日に、をたはらへの御ちんほりをきん助と申十八になりたる子をたたせてより 又ふためとも見さるかなしさのあまりにいまこのはしをかける成 ははの身にはらくるいともなり そくしんしやうふつし給へ いつかんせいしゆんと 後のよの又のちまで 此かきつけを見る人は念仏申給へや 卅三年のくやう也

①名古屋市熱田区伝馬町のあたりにあった川。一九二六年(大正一五)に埋め立てられた。古い橋は精進川埋め立ての時に廃され、「裁断橋趾」の石標が立っている。現在の裁断橋は、その傍らに、一九六九年(昭和四四)縮小復元されたもの。

②一五九〇年。

③豊臣秀吉が北条氏征討のため小田原へ出陣したことをさす。

④(一五七三—一五九〇)尾張国(今の愛知県)丹羽郡御供所の

豪士、堀尾修理亮の一子。一説に、後に出雲国（今の島根県）松江城主となった堀尾吉晴の子ともいう。

⑤ 堀尾金助の戒名。

⑥ 金助が陳没した天正十八年ごろ、母が息子の供養のため腐朽していた裁断桶を最初に修築し、三十三回忌に再度修築の際に銘文を記した。

（くろさわ ひろみつ 元筑波大学附属高等学校教諭）